古今和歌集　上

やまとうたハ人のこゝろをたねとしてよろつのことの
葉とそなれりける世中にある人ことわさしけき
ものなれは心に思ふ事を見るものきくものに
つけていひいたせるなり花になく鶯水にすむ
かはつの声をきけはいきとしいけるものいつれか
歌をよまさりけるちからをもいれすしてあめつち
をうこかしめにみえぬ鬼神をもあはれとおも
はせをとこ女のなかをもやはらけたけきものゝふの
心をもなくさむるは哥なり此哥あめつちの

ひらけはじまりける時よりいできにけり
あまのうきはしのしたにて女神男神となりたまへることをいへるうたなり
しかあれども世につたはることは　ひさかたのあめにしてはしたてるひめに
はじまり　したてるひめとはあめわかみこのめなり兄神のかたちをかにうつりてかゝやくをよめるえびす哥なるべし
これらは文字のかずもさだまらず哥のやうにもあらぬことゞもなり　あらかねのつちにてはすさ
のをのみことよりぞおこりける　ちはやぶる
神代には哥の文字もさだまらず素直にして事の
心わきがたかりけらし人の世と
なりてすさのをのみことよりぞみそもじあま
りひともじはよみける　すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり女とすみたまはんとていづもの国に宮つくりしたまふ時にその所にやいろの雲のたつを見てよみたまへるなり
やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを
かくて
ぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれび露を
かなしぶ心ことば多くさまざまになりにける
とほき所もいでたつあしもとよりはじまりて
年月をわたりたかき山もふもとのちりひぢより
なりてあま雲たなびくまでおひのぼれ
るごとくにこのうたもかくのごとくなるべしなにはづの

哥はみかとのおほんはしめなり おほさゝきのみかとのなにはつにてみこときこえける時東宮をたかひにゆつりてくらゐにつきたまはて三年になりにけれは王仁といふ人のいふかり思てよみてたてまつりける哥也この花は梅の花をいふなるへし

あさか山のことはゝ采女のたはふれよりよみて かつらきのおほきみをみちのくへつかはしたりける時に国のつかさことおろそかなりとてまうけなとしたりけれとすさましかりけれは采女なりける女のかはらけとりてよめるなりこれにそおほきみの心とけにける

この二哥は歌の父母のやうにてそ手ならふ人のはしめにもしける

そもそも哥のさまむつなりからの哥にもかくそあるへき そのむくさのひとつにはそへ哥 おほさゝきのみかとをそへたてまつれるうた

なにはつにさくやこの花冬こもり
今ははるへとさくやこの花

といへるなるへし

ふたつにはかそへうた

さく花に思ひつくみのあちきなさ
身にいたつきのいるもしらすて

といへるなるへし これはたゝこといひてものにたとへなとせぬものなりこのうたいかにいへるにかあらんその心えかたしいつゝにたゝことうたといへるなんこれにはかなふへき

みつにはなすらへうた

夜しけてあしをの嶋かねさそいをて聲も哉き
うたゝねやけさんといへるなり
この句ハ我まゝ良にしへ今ハ名をとゝめやうりなんおのゝやすみいつあり
のうきかさへりとしみて哀さしものおやのうへこのまもこらり
いかくもおくいさいまにめくく
かるすのやこれハの名をへのらん
とはりハたゝへ笑こ
我恋はよむまつさしありそ海士浦風
まさこ哉よみんはくもとゝいへるなり
これハ我引乃草木鳥けるおりつけて心にいりあきらの名ハ我れ
をのおのふしされとはしめ乃としへ名と我乃思つされてはらしき
まおへらかならて浪まれあまのあまれ声れる浦風といてゝ思ふね
さうしたるひさろり山を名のなとやかな庵らん
いはしてりハ我としおもひつゝ
いはてしやの名れせゆりそはいそかくへの為ひ
うきつしかとしましとへるなり
これハものゝそのおりたしもとをいろうりこのうこ思ひらきこうる
かなのにこゝのもやうへ名をらん山桜あしまで名をらう我秋を
為くし風つぬた
むかし名はいさひ笑こ
ちかきものハ世しへていろみん仏りされつきのかて
ねりさたゝこのつゝりを思ふとへるなり
この頃ハなおもしく袖よけし為なりこの名ハいて年ふことは
人々たかんあり春日野よけりかつ仏りましありいを秋いと声か

神とあるらんこれやもろこしの歌のさまなるへし
およそむくさにわかれんことはえあるまじき事になん　今の世中色に
つき人の心花になりにけるよりあだなる歌
はかなきことのみいでくれば色このみの家にうもれ
木の人しれぬこととなりてまめなるところには
花すゝきほにいだすべき事にもあらずなりにたり
そのはじめを思へばかゝるべくなんあらぬいにしへ
の世々の御門春の花のあした秋の月の夜ごとに
さぶらふ人々をめして事につけつゝ歌をたてまつらしめ
給ふあるは花をそふとてたより
なき所にまどひあるは月を思ふとてしるべなき
闇にたどれる心々を見給ひてさかしおろか
なりとしろしめしけんしかあるのみにあらずさゞれ石に
たとへつくば山にかけて君をねがひよろこび身に
すぎたのしび心にあまり富士の煙によそへて人を
恋ひ松虫の音に友をしのび高砂住の江の
松もあひおひのやうにおぼえ男山の昔を思ひ
出でて女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞ
なぐさめけるまた春のあしたに花のちるを見

秋の夕くれに木の葉の落るをきゝて あるはとしことに
かゝみのかけにみゆる雪と浪とをなけき
草の露水のあはをみて我身をおとろき あるは
きのふはさかへおこりて時をうしなひ世にわひ
したしかりしもうとくなり あるは松山の浪をかけ
野中の水をくみ 秋はきの下葉をなかめ あかつきの
しきのはねかきをかそへ あるはくれ竹のうきふしを
人にいひ よしの河をひきて世中を
うらみきつるに 今はふしの山も煙たゝすなり なからの
はしもつくるなりときく人は歌にのみそ心を
なくさめける いにしへよりかくつたはるうちにもならの
おほん時よりそひろまりにける かのおほん
世や歌の心をしろしめしたりけん かのおほん
時におほきみつのくらゐかきのもとの人丸
なん歌のひしりなりける これは君も人も身を
あはせたりといふなるへし 秋の夕へ龍田川に
なかるゝもみちをはみかとのおほんめには錦と見
たまひ春のあしたよしのゝ山のさくらは人まろ

うちつみは雲かくのとふかれ阿しらうの文山の人
乃あらへとよ人ありきてこそあ中らく君人
あり/\人まろハ赤人かたにたんとかくい
か人をへ者猿か之てりきまんとかくしな世
ありしかあきのみかとの御ときに龍田川お家みてこ猿くかゝる
めりもつらハ猿なりやたつかん人まろ梅むらきて
みそとひきうのあまさら富のなへつうそ宝てハかのくとあそしの
うち乃あききりよ因くれ紛糸とうそうふ赤人喜のつよすきく
もつらみこうわき乃聖となつしとひ衆猿よりうりのうる
志ゆみちくれハかこそちしめ人をさして身川鳴きる
志姿人をへおきてく文正くれ有あるへをもく猿けの
世くりきこえくこいとのそうり中にたて侍てあり

乃家これより清まろ乃哥をあつめてなん万えふ
志うとなつけ乳せられたりけるかい人乃とほと
哥乃心をもしらさるへまろこにひろりてそうりなりき
志かあれとも猿つれえてると猿えぬ所なれは
なんとの家かの清時よりこのかた年ハもゝとせあまり
世はとつきうしなんありに宮るかすか人乃事をも
宮ことをもしるへかとし人おほつて今このこと
といふなつきとくるそうの人をは猿やまと歌や
かれをいまた其外まちつきこ世よりの名をきこえ

かする人今こそまさうち備忘遍照ハうこ乃さ波ハゑるゝ
まきと申とまくなしたゞ人て未ぬうけるまゝなを
みくいうつゝ心ばへこゝろ行か志し　あさみうりいて
よりわけて白あるを
むかしぬ宵乃春乃柳りまもとるのふくらにまぬ心りくなつつハ
寐ぬをむしあさむしくさこ師まく鳥よりあちてあり各よめてく
むまつゝそうりさそまる
我かちよさきと人々よかくろまゝ　あるいは乃なりひゝハ秋のうち
いまりてあく氣そ々しい三日ある三秋の色なりして
みちひのこゝまるゝ志し　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつハもとの身にて
おほかたは月をもめでしこれぞこのつもれは人のおいとなる
紀乃歌の意をとりて申さハいやまされりともまうすの
らんやの康をひてハ云もくハさくかへりてそのさ海ぬよ

わたいひうあさ人乃とゆくぬさそてんかち志し
此さう業平の半身の…
あるね　宇治山乃僧きせんさそう義ふ行かみてそあ
とりうすうかなしいひいそ秋乃月をとらるにあるさ
乃雲よあへるかうとし　わか庵ハ都のたつみしかそすむ
世をうち山と人ハいふなり
くあるうつ わかほどきこゑそひとつわれ道とかよはせ
よくあれそ小町ハ人乃すくなりひあれ
流なりあられなりやうにくつよわきハいふとた
なうちもやめる病あるよみゆるうけよくうしね
たき

つよからぬは女のうたなれはなるへし

思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

色みえてうつろふものは世中の人の心の花にそありける

わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそ思ふ

そとほりひめのうた　わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

大伴の黒ぬしは其さまいやし　いはゝたきゝおへる山人の花のかけにやすめるかことし

思ひいてゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人はしらすや

かゝみ山いさたちよりて見てゆかん年へぬる身はおいやしぬると

此外の人々その名きこゆる野へにおふるかつらのはひひろこり林にしけき木の葉のことくにおほかれとうたとのみ思ひてそのさましらぬなるへし　かゝるに今すへらきのあめのしたしろしめす事よつの時こゝのかへりになんなりぬる　あまねき御いつくしみのなみやしまのほかまてなかれ　ひろき御めくみのかけつくは山のふもとよりもしけくおはしまして　萬のまつりことをきこしめすいとま　もろ〳〵の事をすてたまはぬあまりに　古の事をも忘れし　ふりにし事をもおこしたまふとて　今も見そなはし　後の世にもつたはれとて　延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書のところのあつかり

あつかりきのつらゆきさきのかひのさう官おふしかうち
ちのみつね右衛門の府生みふのたゝみねらに
おほせられて万えふしふにいらぬふるきうた
みつからのをもたてまつらしめたまひてなむそれか
なかにむめをかさすよりはしめてほとゝきすを
きゝもみちをおり雪をみるにいたるまて又は
つるかめにつけて君をおもひ人をもいはひ秋はき
夏草をみてつまをこひあふさか山にいたりてたむけを
いのりあるは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵

のうたをなむえらはせ給ひけるすへて千うた
はたまき名つけて古今和歌集といふかくこのたひ
あつめえらはれて山した水のたえすはまの
まさこのかすおほくつもりぬれはいまはあすかゝ
はのせになるうらみもきこえすさゝれ石のいはほ
となるよろこひのみそあるへきそれまくら詞春の
花にほひすくなくしてむなしき名のみ秋
のよのなかきをかこてれはかつは人のみゝにおそり
かつはうたの心にはちおもへとたなひく雲のたち
ゐなくしかのおきふしは貫之らかこの世におなしく

ゐなくしかのねきゝてこゝろをしてうたの世に
ねおもしろくしまをく哥の事は時にあひあへるをなん
よろこひける人もあるはなけきつゝれと歌のさく
とこまれかつうらなし時うつる事さりそあらし
かはりし程をきこえしこの道もあるはやあしを
やまとの表にえん松のうちは数をしもさまさむ
茂ての名なりくさへいりかうの詠歌さへ
ときは程かは歌の風をしもその縁を
えらはん人は是をしくもみ月をまちえたまへくる

任あし人をあつめて いまはひきうつしあつめと

古今和歌集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

年の内に春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいつこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

二条のきさきの春のはしめの御うた

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらす　よみ人しらす

梅かえにきゐるうくひす春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

題しらす　素性法師

春たてははなとや見らん白雪のかゝれる枝にうくひすのなく

題しらす　よみ人しらす

心さしふかくそめてしおりけれはきえあへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちきみのうたなり

二条后のとう宮のみやす所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせことあるあひたに日はてりなから雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

文屋やすひて

春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき

雪の降けるをよめる

きのつらゆき

霞たちこのめも春の雪ふれは花なき里も花そちりける

春の始によめる　ふちはらのことなほ

春やとき花やおそきとききわかむ鶯たにもなかすもあるかな

春の始の哥　みふのたゝみね

春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそ思ふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

源まさすみ

谷風にとくる氷のひまことにうち出る浪や春のはつ花

紀とものり

花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

大江千里

鶯の谷より出る声なくは春くることをたれかしらまし

在原棟梁　業平朝臣男

春たてと花もにほはぬ山さとはものうかるねに鶯そなく

題しらす　よみ人しらす

野へちかく家ゐしせれは鶯のなくなる声はあさなあさなきく

春日野ハけふハなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり
この哥ハ古乃ゆかりありてよみいたしたる哥にて若菜つミなとの
みよしのハ松の雪もふりきえし比なれハ野辺のけしきもなつかしけれ
猶さえて春雨ふりすさみぬる比なれハ人もいまたこれにつきても
仁和のみかとみこにおましましける時に人にわか
なたまひける御うた
君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪ハふりつゝ
此哥ハよく心つまりと又えらひて侍る時なりて
さて御つまる　侍るとき

春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん
題しらす　在原行平朝臣
春のきる庭の夜ねさめをさそふ山風にさそへてちる
鹿のつまやとふいつのまにか鳴らん
源　のゆきの朝臣
これハ谷の松の緑も春にあへりといへはいよいよ
哥たまつまりと侍る時なりて
そこくゆかる侍る　侍るとき
我せこか衣のすそをふきかへしうらめつらしき秋のはつ風

青柳のいとよりかくる春しもそみたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさ緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

題しらす　よみ人しらす

もゝちとりさへつる春はものことにあらたまれとも我そふりゆく

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな

かりのこゑをきゝてこしへまかりける人を思ひてよめる

凡河内躬恒

春くれは鴈かへるなり白雲のみちゆきふりにことやつてまし

帰雁をよめる　伊勢

春霞たつをみすてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

おりつれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝに鶯のなく

色よりもかこそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも

宿ちかく梅の花うへしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり

梅花たちよるはかりありしより人のとかむるかにそしみぬる

むめの花をおりてよめる

東三條左のおほいまうちきみ

鶯のかさにぬふてふ梅の花をりてかさゝん老かくるやと

題しらす　素性法師

よそにのみあはれとそみし梅の花あかぬ色かはをりてなりけり

梅の花をゝりて人におくりける　とものり

君ならて誰にかみせん梅の花色をもかをもしる人そしる

くらふ山にてよめる　つらゆき

梅の花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける

月夜に梅の花ををりてと人のいひけれは

おるとてよめる　みつね

月夜にはそれとも見えす梅の花かをたつねてそしるへかりける

はるの夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ

はつせにまうつることに宿りける人の家に

久しくやとらて程へてのちにいたれりけれは

かの家のあるしかくさたかになんやとりはあると

いひ出して侍りけれはそこにたてりける
梅の花を折りてよめる

貫之

人はいさ心もしらすふるさとは花そむかしの香ににほひける

水のほとりに梅の花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ川を花とみて折られぬ水に袖やぬれなむ

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家にありける梅の花のちりけるをよめる

貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

梅かゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす

よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅の花こひしき時の思ひいてにせん

人の家にうへたりけるさくらの花さきはしめたりけるを見てよめる

つらゆき

ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはさらなん

題しらす

よみ人しらす

山たかみ人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我見はやさん

又さとゝをみ人もすさめぬ山さくら

山桜わかみにくれは春霞峰にもをにもたちかくしつゝ

そめとののきさいのまへに花かめに桜の花をさゝせたまへるを見てよめる

さきのおほいまうちきみ

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をし見れは物おもひもなし

なきさの院にてさくらを見てよめる

在原業平朝臣

世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす

よみ人しらす

いしはしるたきなくもかな桜花たをりてもこん見ぬ人のため

山のさくらを見てよめる

そせいはうし

みてのみや人にかたらん桜花てことにをりていへつとにせん

花さかりに京をみやりてよめる

見わたせは柳さくらをこきまぜて都そ春の錦なりける

桜の花のもとにて年のおいぬることをなけきて

よめる　　きのとものり

色もかもおなしむかしにさくらめと年ふる人そあらたまりける

をれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらん山の桜を

歌たてまつれとおほせられし時によみて

たてまつれる

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひよりみゆる白雲

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

とものり

みよしのゝ山へにさける桜花雪かとのみそあやまたれける

やよひにうるふ月のありける年よみける

いせ

桜花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやハせぬ

さくらの花のさかりにひさしくとはさり
ける人のきたりける時によみける

よみ人しらす

あたなりと名にこそたてれ桜花としにまれなる人もまちけり

返し

なりひらの朝臣

けふこすハあすハ雪とそ降なましきえすハありとも花とみましや

題しらす

よみ人しらす

ちりぬれはこふれとしるしなき物をけふこそ桜おらはおりてめ

おりとらハおしけにもあるか桜花いさやとかりてちるまてハみん

きのありとも

桜色に衣ハふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

さくら花のさけりけるをみにまうてきたりける
人によみておくりける

みつね

わかやとの花みかてらにくる人ハちりなん後そこひしかるへき

亭子院歌合の時よみける

伊勢

みる人もなき山里の桜花ほかのちりなんのちそさかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらす　　よみ人しらす

春霞たなひく山の桜花うつろはんとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにを桜におもひまさまし

残りなくちるそめてたき桜花ありて世中はてのうけれは

この里に旅ねしぬへし桜花ちりのまかひに家路わすれて

うつせみの世にもにたるか花桜さくと見しまにかつちりにけり

僧正遍昭によみておくりける

こと葉たかみかへし

桜花ちらはちらなんちらすとてふる里人のきても見なくに

雲林院にてさくらの花のちりけるを見てよめる

そうく法師

さくらちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにする

桜の花のちり侍りけるをみてよみける

そせい法師

花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよ行てうらみん

うりん院にてさくらの花をよめる

そうく法師

いさ桜我もちりなんひとさかりありなは人にうきめみえなん

あひしれりける人のまうてきてかへりにける後によみて花にさしてつかはしける

つらゆき

ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらはちらなん

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにも見るへき物を

心地そこなひてわつらひける時に風にあたらし

あたらしとておろしこめてのみ侍ける
あひたにをれる桜のちりかたになれりける
をみてよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春の行ゑもしらぬまに待し桜もうつろひにけり

東宮雅院にて桜の花のみかは水にちりてなかれけるをみてよめる

すかのゝたかよ

枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあわとこそなれ

桜乃花のちりかゝるをよめる

つらゆき

ことならはさかすやはあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし

桜のことくとくちる物はなしと人のいひけれは読る

桜花とくちりぬともおもほえす人の心そ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる

きのとものり

久かたの光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

春宮のたちはきのちんにて桜の花のちるを

よめる　　藤原のよしかせ

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみん

さくら落ちるをよめる

凡河内みつね

雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん

ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

つらゆき

山たかみみつゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり

題しらす　　大伴くろぬし

春雨のふるは涙か桜花ちるをおしまぬ人しなけれは

亭子院歌合歌

つらゆき

桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そ立ける

ならの帝の御うた

ふるさととなりにしならの都にも色はかはらす花はさきけり

春の歌とてよめる

よしみねのむねさた

花の色は霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山かせ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
素性法師
花乃木も今ハほりうへし春たてハうつろふ色に人ならひけり
題しらす　よみ人しらす
春乃色のいたりいたらぬ里ハあらしさけるさかさる花のみゆらん
はるのうたとてよめる
つらゆき
みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん
うりんゐんのみこのもとに花見にきた山
のほとりにまかれりける時によめる
そせい
いさけふハ春乃山辺にましりなんくれなハなけの花のかけかハ
はるのうたとてよめる
いつまてか野辺に心のあくかれん花しちらすハ千世もへぬへし
題しらす　よみ人しらす
春ことに花のさかりハありなめとあひみん事ハ命成けり
花のことよのつねならハすくしてし昔ハ又もかへりきなまし
吹風にあつらへつくる物ならハこの一もとハよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてける哉

寛平の時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

さく花はちくさなからにあたなれとたれかは春を恨はてたる

春霞色のちくさに見えつるはたなひく山の花のかけかも

在原元方

霞たつ春の山へはとほけれと吹くる風は花のかそする

うつろへる花を見てよめる

みつね

花見れは心さへにそうつりける色にはいてし人もこそしれ

題しらす

よみ人しらす

鶯のなく野へことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風をなきてうらむな鶯は我やは花にてたにふれたる

典侍洽子朝臣

ちる花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に歌合せんとしける時によみける

藤原後蔭

花のちることやわひしき春霞たつたの山の鶯の声

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへはをのかはかせにちる花をたれにおほせてこゝらなくらん

鶯の花の木にてなくをよめる躬恒

しるしなきねをもなくかなうくひすのことしのみちる花ならなくに

題しらす　よみ人しらす

こまなめていさみにゆかん故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみん世中に我身もともにあらんものかは

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

仁和中将のみやすん所の家に歌合せんとしける時によめる

そせい

おしと思ふ心はいとによられなん散花ことにぬきてとゝめん

しかの山こえに女のおほくあへりけるによみ

てつかはしける

つらゆき

あつさゆみ春乃山へをこえくれはみちもさりあへす花そちりける
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花にみちはまとひぬ
山てらにまうてたりけるによめる
やとりして春乃山へにねたるよは夢のうちにも花そちりける
紀つらゆき
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
吹風と谷乃水としなかりせはみ山かくれの花をみましや
志かよりかへりけるをうなともの花山に
いりて藤乃花のもとにたちよりてかへりけるに
よみておくりける
僧正遍昭
よそにみてかへらん人に藤乃花はひまつはれよ枝はをるとも
家に藤の花のさけりけるを人のたちとまりて
みけるをよめる
みつね
我宿にさける藤浪たちかへりすきかてにのみ人のみるらん
題しらす
よみ人しらす
今もかもさきにほふらん橘のこしまのさきの山吹の花

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹ハあやなゝさきそ花見んと植けん君かこよひこなくに

よしの河のほとりにやまふきのさけりけるを

よめる　　　つらゆき

よしの川岸の山吹ふく風にそこのかけさへうつろひにけり

題しらす　　読人しらす

かハつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

この歌ハある人のいはく橘のきよともか歌也

春の歌とてよめる　　そせい

思ふとち春の山辺にうちむれてそこともいはぬたひねしてしか

春のとく過るをよめる　　みつね

あつさ弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひに鶯の声のひさしうきこえさりけるを

よめる　　つらゆき

鳴とむる花しなけれハ鶯もはてハものうく成ぬへらなり

風よひの月はくもりかすみたに山のはたてにかゝり
山川よりむらのかれはをとゝめる
雅やふ
花ちる滝の水のまふくとある夜ハ山ハきえてさく盛なり
春はかれしかくてこあり
ともとく
れしめくこともまきなくに春霞へる花あけちらぬに
寛平の御ときさいの宮の哥合のうた
おきかせ

春なきはなけや鶯こゑせよ二つむかしの春ハ
やよひのつきもなれは日数のまさりけり
せしとみえてまあり
清輔
ともしひのかけはあさけりとも数よとにたえぬか
風よひのつきもなれは日数のますりはかりに夢の
夜とれにくにはつしはる
なかひさ朝臣
ねまつり春の年の内よ春はいへきあけとこそ

亭子院の哥合によみてのうた

みつね

はるのこと暮を思ふる時は花の山まやまにかゝる霞の
はるのゝ

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　よみ人しらす

我やとの池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなかん

このうたある人のいはくかきのもとの人まろか也

うつきにさけるさくらをみてよめる

紀としさた

あはれてふことをあまたにやらしとや春にをくれてひとりさくらん

題しらす　よみ人しらす

さつきまつ山時鳥うちはふき今もなかなんこそのふるこゑ

伊勢

五月こそなとうつろふらん郭公まつすきぬるのこゑそきくや

読人しらす

さ月まつ花たちはなのかをかけはむかしの人の袖のかそする

いつのまにさ月きぬらんあしひきの山時鳥いまそ鳴なる

けさきなきいまた旅なる時鳥花たちはなにやとはからなん

音羽山こえける時に時鳥のなくをききて

よめる

きのとものり

音羽山けさこえくれは郭公こすゑはるかにいまそなくなる

時鳥のはしめてなきけるをききて

そせい

時鳥はつこゑきけはあちきなくぬしさたまらぬこひせらるはた

ならのいその神てらにて時鳥のなくを

よめる

いその神ふるきみやこの郭公こゑはかりこそむかしなりけれ

題しらす

よみ人しらす

夏山になく郭公心あらはものおもふ我にこゑなきかせそ

郭公なく声きけハ別れにしふるさとさへそ恋しかりける
ける汝かなく里のあまたあれハ猶うとまれぬ思ふものから
おもひいつるときはの山の郭公からくれなゐのふり出てそなく
声はして涙は見えぬ郭公我衣手のひつをからなん
足引の山郭公をりはへて誰かまさると音をのみそなく
今さらに山へかへるな郭公声のかきりは我宿になけ
みくにのまち
やよやまて山郭公ことつてん我世中にすみわひぬとよ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
きのとものり
さみたれに物思ひをれハ時鳥夜ふかくなきていつちゆくらん
夜やくらき道やまよへる郭公我宿をしもすきかてになく
大江千里
やとりせし花橘もかれなくになと郭公声たえぬらん
きのつらゆき
夏の夜のふすかとすれハ郭公鳴一声にあくるしのゝめ
みふのたゝみね
くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山ほとゝきす

紀秋岑

夏山に恋しき人やいりにけん声ふりたてゝなく郭公

題しらす　読人しらす

こそのなつなきふるしてし時鳥それかあらぬか声のかはらぬ

ほとゝきすのなくをきゝてよめる

つらゆき

五月雨のそらもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらん

さふらひにてをのことものさけたうへけるに

めして郭公まつうたよめとありけれはよめる

みつね

郭公声もきこえす山ひこはほかになくねをこたへやはせぬ

山に郭公のなきけるをきゝてよめる

つらゆき

郭公人まつ山になくなれは我うちつけに恋まさりけり

はやくすみける所にてほとゝきすのなきけるを

きゝてよめる

忠岑

むかしへや今も恋しき時鳥ふるさとにしも鳴てきつらん

ほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

みつね

時鳥われとはなしにうのはなのうき世中になき渡るらん

はちすの露をみてよめる

僧正遍昭

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく

月のおもしろかりける夜あかつきかたに

よめる　ふかやぶ

夏の夜はまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとるらん

となりよりとこ夏の花をこひにおこせた

りけれはをしみて此うたをよみて

つかはしける　みつね

ちりをたにすゑしとそ思ふさきしよりいもとわかぬるとこ夏の花

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへすゝしき風やふくらん

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかにみえねとも風のをとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる　　つらゆき

かは風のすゝしくもあるかうちよする浪とともにや秋ハ立らん

題しらす　　読人しらす

わかせこか衣のすそを吹返しうらめつらしき秋の初風

昨日こそさなへとりしかいつのまにいなはそよきて秋風の吹

秋風の吹にし日より久方のあまのかはらにたゝぬ日はなし

久かたのあまのかはらのわたしもり君わたりなはかちかくしてよ

天川もみちをはしにわたせはやたなはたつめの秋をしもまつ

恋こひてあふよはこよひ天川霧たちわたりあけすもあらなん

寛平御時なぬかのよるうへにさふらふをのこともうたてまつれとおほせられける時人にかはりてよめる　とものり

天川あさせしらなみたとりつゝわたりはてねはあけそしにける

おなし御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

契りけん心そつらき七夕の年にひとたひあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる　凡河内みつね

年毎にあふとはすれと七夕のぬるよのかすそすくなかりける

七夕にかしつるいとのうちはへて年のをなかくこひや渡らん

題しらす　そせい

こよひこむ人にはあはし七夕のひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる　　源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天の川わたらぬさきに袖そひちぬる

やうかのひよめる　　みふのたゝみね

けふよりは今こん年の昨日をそいつしかとのみまちわたるへき

題しらす　　よみ人しらす

このまよりもりくる月の影見れは心つくしの秋はきにけり

大かたの秋くるからにわか身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひはつゆけかりけり

これさたのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりける

かんなりのつほに人々あつまりて秋の夜おしむ歌よみけるついてによめる

みつね

かくはかりおしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらん人さへそうき

題しらす　　　　読人しらす

白雲にはねうちかはしとふ雁のかすさへ見ゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁かねのきこゆる空に月わたるみゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見れはちゝに物こそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

たゝみね

久かたの月の桂も秋は猶もみちすれはやてりまさるらん

月をよめる

在原元方

秋の夜の月の光しあかけれはくらふの山もこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きりきりすのなきけるをきゝてよめる

藤原たゝふさ

蛬いたくなゝきそ秋の夜のなかき思ひは我そまされる

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらすなく虫はわかことものやかなしかるらん

題しらす　　　　よみ人しらす

秋萩も色つきぬれはきり〳〵すわかねぬことやよるはかなしき
秋の夜は露こそことにさむからし草むらことに虫のわふれは
きみしのふ草にやつるゝふるさとはまつ虫のねそかなしかりける
秋の野に道もまとひぬ松虫のこゑする方に宿やからまし
秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていさとふらはん
もみち葉のちりてつもれる我宿に誰をまつ虫こゝらなくらん
ひくらしの鳴つるなへに日はくれぬとおもふは山のかけにそありける
日くらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし
初雁をよめる
在原元方
待人にあらぬ物からはつかりのけさ鳴こゑのめつらしきかな
是貞のみこの家の歌合のうた
とものり
秋風に初雁かねそきこゆなるたかたまつさをかけてきつらん
題しらす
よみ人しらす
わか門にいなおほせとりの鳴なへにけさふく風に雁はきにけり
いとはやもなくなる雁か白露の色とる木々も紅葉あへなくに
春霞かすみていにしかりかねは今そ鳴なる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩の下葉もうつろひにけり
このうたはある人のいはく柿本の人まろがなりと

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあげてくる船はあまのとわたる雁にぞありける

雁のなくをききてよめる

躬恒

うきことを思ひつらねて雁がねのなきこそわたれ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合のうた

たゝみね

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねにめをさましつつ

よみ人しらず

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時ぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをればあしひきの山したとよみ鹿のなくらん

秋萩をしがらみふせてなく鹿のめにはみえずておとのさやけさ

これさだのみこの家の歌合によめる

藤原としゆき朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿は今や鳴らん

むかしあひしりて侍りける人の秋の野にあひて
ものかたりしけるついてによめる

みつね

秋萩のふる枝にさける花見れは本の心はわすれさりけり

題しらす　よみ人しらす

あき萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

鳴わたる雁の涙やおちつらん物思ふ宿の萩のうへの露

萩の露玉にぬかんととれはけぬよし見ん人は枝なから見よ

或人のいはくこの哥はならのみかとの御哥なりと

をりてみはおちそしぬへき秋萩の枝もたわゝにをける白露

萩かはなちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる

文屋あさやす

秋の野にをく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすち

題しらす　僧正遍昭

名にめてゝおれるはかりそ女郎花われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時に

をとこ山にて女郎花をみてよめる

ふるのいまみち

女郎花うしとみつゝそゆきすくるをとこ山にしたてりと思へは

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへし女郎花なをむつましみたひならなくに

をのゝよしき

女郎花おほかる野辺にやとりせはあやなくあたの名をやたちなん

朱雀院の女郎花あはせによみてたてまつりける　左のおほいまうちきみ

女郎花秋の野風にうちなひき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣

秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

みつね

つまこふる鹿そなくなる女郎花をのかすむ野の花としらすや

をみなへし吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

よみ人しらす

人のみることやくるしき女郎花秋きりにのみたちかくるらん
ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへてみましを

物へまかりけるに人の家に女郎花うへたりけるをみてよめる

兼覧王

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたるやとにひとりたてれは

寛平御時蔵人所のをのこともさかのに花みんとてまかりたりける時かへるとて
みな哥よみけるついてによめる

平さたふん

花にあかてなにかへるらん女郎花おほかるのへにねなましものを

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけしふちはかまくる秋ことにのへをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やとりせし人のかたみかふちはかまわすられかたき香ににほひつゝ

ふちはかまをよめる　そせい

ぬしゝらぬかこそにほへれ秋のゝにたかぬきかけし藤はかまそも

題しらす　平貞文

今よりハうへてたにみし花すゝきほにいつる秋ハわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

秋のゝの草のたもとか花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらん

素性法師

我のみや哀と思ハん蛬なく夕かけのやまとなてしこ

題しらす　よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春ハ見し秋ハ色〳〵の花にそありける

もゝ草の花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとかめそ

月草に衣ハすらん朝露にぬれての後ハうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時ふるのたき御らんせんとておはしましける道に遍昭か母の家にやとりたまへりける時に庭を秋のゝにつくりておほんものかたり

語のついてによみてたてまつりける

僧正遍昭

里ハあれて人ハふりにしやとなれや庭も籬もあきののらなる

古今和歌集巻第五

秋哥下

是貞のみこの家の哥合のうた　文屋やすひて

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

草も木も色かはれともわたつ海の波の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時によめる

紀よしもち

もみちせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん

題しらず　　よみ人しらず

霧立ちて雁ぞ鳴くなる片岡の朝の原はもみぢしぬらん

神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり

ちはやぶる神なびの山のもみぢばに思ひはかけじうつろふものを

貞観の御時綾綺殿のまへにむめの木ありけり西のかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるをうへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる

藤原かちおむ

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

いし山にまうでける時おとは山のもみぢを見てよめる　　つらゆき

秋風の吹きにし日よりおとは山峰のこずゑも色づきにけり

これさだのみこの家の歌合によめる　　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらん

壬生忠岑

秋の夜の露をば露とおきながら雁の涙や野べをそむらん

題しらす　　よみ人しらす

秋の露色〳〵ことにをけはこそ山の木の葉のちくさなるらめ

つらゆき

しら露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色つきにけり

秋の哥とてよめる

ありはらのもとかた

雨ふれと露ももらしをかさとりの山はいかてかもみちそめ剱

神の社のあたりをまかりける時にいかきの

うちの紅葉をみてよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

これさたのみこの家の哥合によめる

たゝみね

雨ふれはかさとり山の紅葉はゝ行かふ人の袖さへそてる

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

ちらねともかねてそをしき紅葉はゝ今は限の色とみつれは

やまとのくにゝまかりける時さほ山にきりの
たてりけるを見てよめる
きのとものり
たかための錦なれはか秋霧のさほの山へをたちかくすらん
是貞のみこの家の歌合のうた
よみ人しらす
秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝそのもみちよそにても見ん
あきのうたとてよめる
坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくも成にける哉
人のせんさいにきくにむすひつけてうへける
うた
在原なりひらの朝臣
うへしうへは秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや
寛平御時きくの花をよませたまうける
としゆきの朝臣
久方の雲の上にて見る菊はあまつ星とそあやまたれける
この歌はまた殿上ゆるされさりける時に
めしあけられてつかうまつれるとなん

これさたのみこの家の哥合のうた

きのとものり

露なからおりてかさゝん菊の花おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

大江千里

うへし時花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

おなし御時せられける菊合にすはまをつくりて

菊の花うへたりけるにくはへたりけるうた

ふきあけのはまのかたに菊うへたりけるに

よめる

すかはらの朝臣

秋風のふきあけにたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたを

よめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我はへにけん

菊の花のもとにて人の人まてるかたを

よめる

とものり

花みつゝ人まつ時はしろたへの袖かとのみそあやまたれける

おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる

ひともとゝ思ひし菊をおほさはの池のそこにはたれかうゑけむ　とものり

世中のはかなきことを思ひけるをりに菊の
花をみてよめる　つらゆき

秋の菊にほふかきりはかさしてむ花よりさきとしらぬ我身を

しら菊の花をよめる

凡河内みつね

心あてにおらはやおらむ初霜のおきまとはせる白菊の花

これさたのみこの家の歌合のうた

よみ人しらす

色かはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそみれ

仁和寺に菊のはなめしける時に歌そへてたてまつれとおほせられけれはよみて
たてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊の花をうつしうゑたりけるを
よめる　つらゆき

さきそめしやとしかはれは菊の色さへにこそうつろひにけれ

題しらす　よみ人しらす

さほ山のはゝそのもみちゝりぬへみよるさへみよとてらす月かけ

宮つかへひさしうつかうまつらて山さとに
こもり侍りけるによめる

藤原関雄

おく山のいはかきもみちちりぬへしてる日のひかりみる時なくて

題しらす

よみ人しらす

龍田河もみちはみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなん

このうたはある人ならのみかとの御哥なりとなん申

龍田川もみちはなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすか川もみちはなかる　此哥は人丸か哥

恋しくはみてもしのはんもみちはを吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへすちりぬるもみちはのゆくへさためぬ我そかなしき

秋はきぬ紅葉はやとにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはん紅葉はのふりかくしてし道とみなから

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみちのかすをみよとか

吹風の色のちくさにみえつるは秋のこのはのちれはなりけり

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれはかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみける

僧正遍昭

わひ人のわきてたちよる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけり

二条の后の春宮のみやすん所と申ける時に
御屏風に龍田川に紅葉なかれたるかたをかけりけるを題にてよめる

そせい

紅葉ゝのなかれてとまるみなとには紅ふかき浪やたつらん

なりひらの朝臣

ちはやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとは

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

我きつるかたもしられすくらふ山木ゝの木のはのちるとまかふに

たゝみね

神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ

きた山に紅葉おらんとてまかれりける時に
よめる

つらゆき

みる人もなくてちりぬるおく山の紅葉は夜の錦なりけり

嫁おりて　　　　かねみの王

竜田姫たむくる神のあれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍りける時もみちを見

てよめる　　　　つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむ我さへそたひ心ちする

神なひの山をすきて竜田川をわたりける

時に紅葉のなかれけるをよめる

きよはらのふかやふ

神なひの山をすきゆく秋なれは竜田川にそぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原のおきかせ

白浪に秋のこのはのうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

竜田川のほとりにてよめる

坂上是則

もみちはのなかれさらせは竜田川水の秋をはたれかしらまし

志賀の山こえにてよめる

はるみちのつらき

山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉成けり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる

みつね

風吹ハおつる紅葉ゝ水きよミちらぬかけさへ底にみえつゝ

亭子院の御屏風のゑに川わたらんとする
人のもみちのちる木のもとにむまをひ
かへてたてるをよませ給ひけれはつかうまつりける

躬恒

たちとまりみてをわたらん紅葉ゝハ雨と降とも水ハまさらし

これさたのみこの家の哥合のうた

たゝみね

山田もる秋のかりいほにおく露ハいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらす　よみ人しらす

ほにもいてぬ山田をもると藤衣いなはの露にぬれぬ日ハなし

かれる田におふるひつちのほにいつるハ世を今更に秋はてぬとか

きたやまに僧正遍昭とたけかりにまかれりける
時によめる

そせい法し

紅葉ゝハ袖にこきいれてもていてなん秋ハかきりとみん人のため

寛平御時ふるき哥たてまつれとおほせ

せかれける里は立田川とも花と流るゝ哉
秋とてもにしきの紅葉をあらそふ

おきかぜ

深山より落くる水の色見てぞ秋は限と思ひしりぬる

秋のはつる心を龍田川に思ひやりてよめる

つらゆき

年ごとに紅葉ば流す龍田川みなとや秋のとまり成らん

長月のつこもりの日大井にてよめる

夕月夜小倉の山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

おなじつこもりの日よめる

みつね

道しらばたづねもゆかん紅葉ばをぬさとたむけて秋はいにけり

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　よみ人しらす

龍田川錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬のうたとてよめる

源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

題しらす　よみ人しらす

おほそらの月のひかりしきよけれは影みし水そ先こほりける

ゆふされは衣手さむしみよしのゝ吉野の山にみ雪ふるらし

今よりハつきてふらなん我宿のすゝきおしなみふれる白雪

ふる雪ハかつそけぬらし足曳の山の瀧つせをとまさるなり

この河にもみちはなかる奥山の雪けの水そいまさるらし

古郷ハ吉野ゝ山しちかけれハひと日もみ雪ふらぬ日ハなし

我宿ハ雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれハ

冬のうたとてよめる

紀貫之

雪ふれハ冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

志賀の山こえにてよめる

紀あきみね

白雪の所もわかすふりしけハいはほにもさく花とこそみれ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にてよめる

坂上これのり

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪ハ白浪の末の松山こすかとそみる

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみわけて入にし人のをとつれもせぬ

白雪の降てつもれる山里ハすむ人さへや思ひきゆらん

雪のふりけるをみてよめる

凡河内みつね

雪降て人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやぶ

冬なからそらより花のちりくるハ雲のあなたハ春にやあるらん

雪の木にふりかゝれるをよめる

つらゆき

冬こもり思ひかけぬを木の間より花とみるまて雪そふりける

やまとの国にまかれりける時に雪のふりけるをみてよめる

坂上これのり

朝ほらけ有明の月とみるまてに吉野の里にふれる白雪

題しらず

読人しらず

けぬかうへに又もふりしけ春霞たちなハみ雪まれにこそみめ

梅の花それとも見えす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは

この哥はある人のいはく柿本人丸か哥也

梅の花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にましりて見えすとも香をたにゝほへ人のしるへく

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にうつりせは誰かことことわきておらまし

雪のふりけるをよめる

紀とものり

雪ふれは木ことに花そさきにけるいつれを梅とわきておらまし

物へまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる

みつね

わかまたぬ年はきぬれと冬草のかれにし人はおとつれもせす

年のはてによめる

在原もとかた

あらたまの年のをはりになることに雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平の時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ

年のはてによめる
はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川なかれてはやき月日なりけり

歌たてまつれとおほせられし時によみて
たてまつれる
紀つらゆき

ゆく年のをしくもあるかなます鏡みるかけさへにくれぬとおもへは

古今和歌集巻之第七

賀哥

題しらす　読人しらす

我君は千世に八千世にさゝれ石のいはほと成て苔のむすまて

わたつ海の濱のまさこをかそへつゝ君か千とせのありかすにせん

しほの山さしての磯にすむ千鳥君か御代をは八千代とそなく

わか齢君か八千世にとりそへてとゝめをきては思ひいてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける

ときの御哥

かくしつゝとにもかくにもなからへて君かやちよにあふよしもかな

仁和のみかとみこにおはしましける時に
御をはのやそちの賀にしろかねをつゑに
つくれりけるをみてかの御をはにかはりてよみける

僧正遍昭

ちはやふる神やきりけむつくからにちとせのさかもこえぬへらなり

堀河のおほいまうちきみの四十賀九条の
家にてしける時によめる

在原業平朝臣

桜花ちりかひくもれおいらくのこむといふなるみちまかふかに

さたときのみこのをはのよそちの賀を
大井にてしける日よめる

きのこれをか

かめのおの山のいはねをとめておつる滝の白玉千世のかすかも

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に桜の花のちるしたに人の花みたるかたかけるをよめる

藤原のおきかせ

徒らにすくる月日はおもほえて花見てくらす春そすくなき　おきかせ

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風
によみてかきける

春くれはやとにまつさく梅の花君か千とせのかさしとそ見る　つらゆき

素性法師

いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君にはしめむ

臥て思ひおきてかそふるよろつ世は神そしるらんわか君のため

藤原三善か六十賀によみける

在原しけはる

つるかめも千とせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはててん

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめに
かはりてよみ侍ける

素性法し

万代をまつにそ君をいはひつる千とせのかけにすまむと思へは

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける
時に四季のゑかけるうしろの屏風に
かきたりけるうた

春の野にまじれつるは万代をいはふ心も神ぞしるらん

山さくら花に井まどふ桜花人の桜さえてもまた白雪

夏

ほととぎすなくや五月の時鳥さらに来なくる声をまち

秋

住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白浪

千鳥なくさほの川霧立ちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

秋の夜はねざめて山の木の葉のちるも風かなしき

冬

冬の夜の山かげしく時はみねの山嵐風も数まさり

まつ葉のむすぼれぬまくらの時にまつもつらく

さむる

世に絹笠原よりの物尽

岩たかきこの浦の花山よりいづる月ハ今もかはらずて人なき也

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらす　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今かへりこむ

よみ人しらす

すかるなく秋の萩原あさたちて旅ゆく人をいつとかまたん

かきりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

をのゝちふるかみちのくのすけにまかりける

時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

さたときのみこの家にてふちはらのきよふか

あふみのすけにまかりける時にむまのはなむけ

しける夜よめる

きのとしさた

けふわかれあすはあふみとおもへとも夜やふけぬらん袖の露けさ

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけと春霞立別なは恋しかるへし

人のむまのはなむけにてよめる

紀貫之

おしむから恋しき物を白雲の立なん後はなにこゝちせん

友たちの人のくにへまかりけるによめる

在原しけはる

わかれてはほとを隔つと思へはやかつみなからにかねて恋しき

あつまへまかりける人によみてつかはしける

そしなう

いかこのあつゆき

思へとも身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる

あふさかにて人をわかれける時によめる

なよたけに結つけゝる

相坂の関しあさしかぬ物ゆへはあはれはつれて来るとこかよ

題しらす　よみ人しらす

かゝる夜の月日はかよひし秋霧のわたりにしゆきはなにぬへきかは

この男はあはれにきゝて捨かたくわすれかたき

ものにおもひしにつけてはすゝろなるへくなとおもひて

きゝあはれなる川しもとよりくるものあり

ことかたにいひてくちよみにかはりこしける

歌ちゝへかへりくるの時になみだおちてかゝれはきこえし

とみにはえいらしなかりけれは

竊

あはれなる男ありけり二条の后のまた帝にもつかうまつり給はて

きのむかしさうなかりける時に人のもの

家にかよひくあはれにつきてむかしよりてゆきけり

中しきれて女君とあはむとおもひしを思ける

よみ人しらす

えたちゝぬ今ゝ男人に合はむと戦やとうへやとかね

かひとりと結ひける人のありけるまめなるゝ

をくるとてよめる

ふかやぶ

雲ゐにもかよふ心のおくれねはわかると人に見ゆはかりなり

ともの東へまかりける時によめる

よしみねのひてむね

白雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくたくたひかな

みちのくへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へたつな

人をわかれける時によみける

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかるらん

あひしれりける人のこしの国へまかりて年へて京にまうてきて又かへりける時によめる

凡河内みつね

かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそ有けれ

こしの国へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらん白山のゆきみるへくもあらぬわか身は

おとはの山のほとりにて人をわかるとてよめる　貫之

作り梅文

さは山おくふかく明る春のわかれをおしむ也

藤原のちかけがよのつひによみし月の

つくりてしたにゆりなおまへのをまつと

ときさけたるひとつ源のくすよみある

ちりくるのよのとり

ところにみなとくともよ蕃秋のこれいつくやいかね

平ともり

妹鶯れもたに立いてまれなる鳴ぬ思ひよそひや婦ん

源さねはすれ人ゆめくみるてまかりける

明しり山をなおみくわれたくまつの法まく

もある

三條め

いかにたへかまゐ称におへは何の別のかなかりまほ

やよさおきはか袖すひのもとりまくふおそう

まへてゆきてこそりそこて別れしく家

わかしりやあり

源さね

人笛のわたみなしいをそこいはうしとはいさりなん

今はゆきまつかり給さなよこいひとつなりぬ

よみける　藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかゝ武蔵のすけにまかりける
時におくりにあふさかをこゆとてよみける

つらゆき

かつこえて別もゆくか相坂は人たのめなる名にこそありけれ

おほえのちふるかこしへまかりける馬のはなむけに
よめる　藤原かねすけの朝臣

君かゆくこしの白山しらねとも雪のまにまに跡はたつねむ

人の花山にまうてきて夕さりつかたかへりなむ
としける時によめる

僧正遍昭

夕くれのまかきは山とみえなゝむよるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人々わかれける
ついてによめる　幽仙法師

わかれをは山のさくらにまかせてむとめむとめしは花のまにまに

うりんゐんのみこの舎利会に山にのほりて
かへりけるにさくらの花のもとにてよめる

僧正遍昭

山風に桜吹まきみたれなん花のまきれに立とまるへく

幽仙法師

ことならハ君とまるへくにほはなんかへすハ花のうきにやハあらぬ

仁和のみかとみこにおはしましける時にふるのたき御らんしにおはしましてかへり給ひけるによめる

兼芸法師

あかすしてわかるゝ涙滝にそふ水まさるとやしもはみゆらん

かんなりのつほにめしたりける日おほみきなとたうへて雨のいたくふりけれハ夕さりまて侍りてまかり出けるをりにさかつきをとりて

貫之

秋萩の花をハ雨にぬらせとも君をハましてをしとこそ思へ

とよめりけるかへし

兼覧王

をしむらん人の心をしらぬまに秋の時雨と身そふりぬる

かねみのおほきみにはしめて物かたりして

わかれの時によめる

みつね

別るれと嬉しくもあるか今宵よりあひみぬさきになにを恋まし

題しらす　　読人しらす

あかすしてわかるゝ袖の白玉は君かかたみとつゝみてそゆく

限なく思ふ涙にそほちぬる袖はかはかしあはん日まてに

かきくらしことはふらなん春雨にぬれきぬきせて君をとゝめん

しひて行く人をとゝめん桜花いつれを道とまよふまてちれ

志かの山こえにていし井のもとにて物

いひける人のわかれけるおりによめる

つらゆき

結ふ手のしつくにゝこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

道にあへりける人の車に物をいひつきて

別ける所にてよめる

とものり

したのおひのみちはかた〳〵わかるとも行めくりてもあはんとそ思ふ

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月をみてよみける　　安倍仲麿

あまの原ふりさけみれハかすかなるみかさの山に出し月かも

このうたハむかしなかまろをもろこしにも
のならハしにつかハしたりけるにあまた
のとしをへてえかへりまうてこさりけ
るをこのくにより又つかひまかりいた

りけるにたくひてまうてきなんとて
いてたちけるにめいしうといふ所のうみへ
にてかの国の人むまのはなむけし
けり夜になりて月のいとおもしろく
さしいてたりけるを見てよめるとなん
かたり伝ふる
おきの国になかされける時に舟にのりて
いてたつとて京なる人のもとにつかは
しける　　小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこき出ぬと人にはつけよあまの釣舟

題しらす　　よみ人しらす

宮こいてゝけふみかの原いつみ川かは風さむし衣かせやま

ほのほのと明石の浦のあさ霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ

この哥はある人のいはくかきのもとの人丸也

あつまの方へ友とする人ひとりふたりいさ
なひていきけり三河の国八橋といふ所にいたれ
りけるにその川のほとりに杜若いとおもし
ろくさけりけるを見て木の陰におりゐて

杜若といふいつもしをくのかみにすへて
旅の心をよまんとてよめる
在原業平朝臣
唐衣きつゝなれにしつましあれははる／＼きぬる旅をしそおもふ
むさしの国としもつふさの国との中にある
角田川のほとりにいたりて都のいと恋しうおほえけれ
はしはし川のほとりにおりゐて思ひ
やれはかきりなくとをくもきにけるかなと
思ひわひてなかめをるにわたしもりはや舟に

のれ日くれぬといひけれは舟にのりてわたらん
とするにみな人物わひしくて京に思ふ人
なくしもあらすさるおりにしろき鳥の
はしとあしとあかき川のほとりにあそひけり
京にはみえぬ鳥なりけれはみな人みしらす
わたしもりにこれは何鳥そととひけれは
これなん宮こ鳥といひけるをきゝてよめる
名にしおはゝいさ事とはん都鳥わか思ふ人はありやなしやと
むしらす　しへ人

きく人の行ゑ鳴なくつまてくにんくさしてゆめて

いはねとも行へも男女と旅なるへかりし

ゆらの神家なとこまかりいくさやこれ

ちみまりゑなれて女也より東へ下り

ふる路より人の旅の鳴なる浅さくくら

めるとなんよ

あつまぢのさやの東へまかりくとて道にて

よめる　　於信

山かくれ春の霞てうかれきつ遠き故郷のさかひあるらん

あひかく東へまかりける時志賀の山越にて

よめる　　みつね

きのふこそ家を出しか心ちなる白山風は雪とふる　　高遠

あつまへまかりける時旅にてよめる　　つら輔

いにしへの梅ならなくに別ちのみそなくなれてあかす

かひかく東へまかりける時みちにてよめる

まれにして逢ふつ萩とこそひつる菜の花よりまさるらし　　兼資

　　　　為信

たちまのくにのゆへまかりける時にふたみの
浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたう
へけるにともにありける人々の哥よみける
ついてによめる　ふちはらのかねすけの朝臣

夕つく夜おほつかなきを玉くしけ二見の浦ハあけてこそ見め

これたかのみこのともにかりにまかりける時に
あまの川といふ所の河のほとりにおりゐて
さけなとのみけるついてにみこのいひけらく
かりしてあまのかはらにいたるといふ心を
よみてさかつきハさせといひけれはよめる
ありはらのなりひらの朝臣

かりくらしたなはたつめにやとからん天川原に我ハきにけり

みこの歌をかへすかへすよみつゝかへしえせすなりに
けれはともに侍りてよめる
きのありつね

ひとゝせに一度きます君まてはやとかす人もあらしとそおもふ

朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ
山にてよみける　すかはらの朝臣

此たひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまにまに

素性法師

手向にはつゝりの袖もきるへきに紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

ほとゝきす

くへきほとゝきすきぬれやまちわひてなくなる声の人をとよむる

うつせみ　在原しけはる

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや

かへし　壬生忠岑

なしとかりこそ秋はつれなくやつれなんかれかうつせ
うゑし　よみ人しらず
わかやとにうゑてみてこそあかぬらめ人にさこそのはなのつ
かはさくら　後撰
せき川の浪のかたにはさくらを松風とになりてこそ
をとこの花
今もなほ遠きかたはいひよとの花をみて思ひ出
かはしもの花　ゆきやふ
かすみたつよの花をもかれわれをまちかねてそみん

さくらを　よしたけのきみ
足引の山さくら花雲居まてさきあらはれ世はよしの
としくまおゐ木　ときとの前
よしみ吉野の花よりみゆる花のさかりのころ
やまさくら木　よみ人しらず
緑なきねはやゆきたえのさかりとそみゆる花のさかり
あさひころ
あくるかなしひのまれはなたる人といひし思ひさかり
人のものかにあさひのかけくはまつるかや思ひのさかり

くたゐ　　備前遍照

数ならてこのちハあくたなる花と思ひて経の字をよむ式

ゆるひ　　清ら梅さ

我ハたゝひとへにうつもの心あくこなる柳にうつり

なかん家趣し　　とまり

白露をもよぬやさしのもよ葉あさい紅染

鈴つ経をかうほうつもとへと今かれ山をみる今見

朱薩院内をつとかへしねとぜの時よとき

とし山川をふとくのかりらよ美くある

清ら梅さ

まくて山のさら辞しなく鹿なくを秋とを今くる

きらの竹のも　　とまり

なかちのれいばらよ白露のとり草いろ色かゆく

志依み　　より人今く依

らりとへいさの清のもとへとあいたにかうらへ　よる

よかんの花　　とまり

我尾このもとさくとこうんのうふくれやそうりとる

松み札　　漢人みさ文

ありとみくたのむかくれつ蝉のこゑはあれとや思ふらん

ふゆかうし　　やまと乃たゝ実

うれつなきりやむもの色をとんとく白露のそむかはりと

二條后春宮のやすむ所と申ける時

めとれはそりをねさせりなとよませ給ける

文屋やすひて

萩乃木よわれ光をさるはそうかみのこなる時ことを

志みふくさ　　きゐとうしけさ

山さくらつまよあらしのふく実ハ白んとあえ候もと数ゝ

やまし　　平あつゆき

郭公の声やまぬはありとハきけと君かよはぬ夜そなき

かりそれ　　よみひとしらす

うの蝉乃うつせミにしむせてむの涼をたつねてあそき

このはあつくさ　　うつやね

うハ萩の露よなかあかハくさまんとつふなすてあるねをと

ほりこけ　　たゝむこみちな

萩の色ハそひてさかりのけ手よを待て露ハきあるそ

ふくろけ　　たけても家

夜とゝもに露をそての世になくこそれは稲葉ひくらよ鳴の空
年はさけ　うけのりのなかきこと
さよふけて奥山は浅はゆふ今こそ月暁今と秋の山ぞ
もらひ　させは法し
燈そらと程ら力て夜草の露乱れわかれひぬゆめは
そわなん
さてまりひはぬせとも　き清めの世
いとあみ時まりまなぬひは今らしぬ夜る人こすて
なし無つめ　くね見人

恋歌
いちきなし君は文かつあそひきことにわかひと思人を秋
わかる
かくして爪かく春の夕け日よみ
安倍清行朝臣
波よせの岸をこちらは秋にまさこゆふは春み立ての庭あらた
まらん
いつて恋文　う子こみかわかき
かちにおとる波の去川人の夜またれはいつきれもちて跡と
とこん
かてこれ　わすれて〇見人
これはにはつてなほさよみてかなん君からは鳩の
こゝろ

伊勢

浪の花さそはれちりかゝる水の春は風や咲らん
かへさは　　つらゆき

うはゝみのほとゝきすやかへるらんかきのけふ雲の白雲
みよしのは

足引の山ざくら花白雲はいつみせてかくれなきかさ
かさの　　そせい法し

夜半に小松にけさまつをまつの枝かけにふく秋の色
こゝろのさや　　源よし成

秋風に月のてるみや山の端を乱てちらうかなせ
百部　　よみ人しらず

萩の花ちらしし風はいくよのうつろひに
すけかね　　ちけの家　　はるの

春のすゑなきしかへひちるをせは蝶くるかりはくる
よみ人しらず　　みやこれしらか

なれつゝくにえぬ深川をさひてやすらぎは
ちるまで　　大江千里　　あきまん

花もなみのそらかつらなれてわくとみはなたのを
とうさく

ことはしもあふなくてとくなりあはれけり
時乃歌よみ出侍るへかりけれはよめる
僧正聖覚
きえのこるなとあのあくやとてとけゆきをもらす友まちかね
なしなり